

研修旅行記

對馬の歴史をたずねて

元寇と、そして毛利氏とのかわり合い

會員 古藤 田 太

私たちが、かねてよりわが佐伯藩とゆかりの深い、宗氏の對馬に、元寇の後の遺跡をたずねたいと願っていたが、今回はからずも機会を得て、弥生町文化財調査委員の四名（大田吉藤田、小野、それに差支不致の五十川君の代りに仲野晋君）で、九月二十六日福岡空港から出発した。

昨日までの雨がウソカような晴天で、志岐上空に差しかかる、雲はいよいよ少なくなり、はつきりと田圃風景や、家並みが流みとれる。

也がて對馬に着いた。ここはさびしい一軒屋の空港である。戸惑うていると、今日の宿屋のご主人が出迎えてくれた。

まず、上見坂展望台に案内された。北十九島に似た風光明媚な辺である。私が驚いたのは敷石であった。その後よく注意して見ると、對馬は石の國である。對馬の人は對馬の石の特性



美しく扁平な面がある水成岩を、実によく生かして、城の石垣から石屋根、屋敷のかい垣に至るまで、たくみに使っている。椎根部落に案内されたが、珍らしい石屋根の倉庫が、幾つと建っている。最近石屋根が変じて、瓦葺となつてゐるものもあるが、石屋根倉庫は對馬の人達

の、生活の知恵から生まれたものである。衣料、食料を湿気からまもる、高床式の納屋である。太いのは木材を使つて建てられ、強風にも耐えられる見事な石屋根に、私達は感心したものである。

車は小茂田の浜に急いだ。ここは元寇の役で古戦場である。日本征都元師忻都と、これを補佐する洪茶丘、劉復亨の指揮のもとに、二万の蒙古人漢人の混合部隊に、金方藤がひきいる高麗人八千人を乗せた九百艘の船艦で、合浦の海はうずめられ、文永十一年十月三日、日本に向かつて進発した。

十月五日午後、ここ小茂田の見張りがこの大船団を発見して、嚴原の國府に急を告げた。

報せを受けた守護代宗右衛門允助國は、手勢八十餘騎で小茂田浜に向かった。すでに夜に入つていた。沖の船艦は山のように静まりかえつていた。

明くれば十月六日朝、一部の船艦が動いて近づいてくる。助國は事の順序として、使者を立て「何故の進攻か」とたずねさせたが、敵は答えず無二無三に寄せてくる。当然矢合せとなり、二時間ばかりの合戦は、宗軍はことごとく討たれた。

蒙古の矢は威力があり、遠くまで達する。宗助國も、助國の子古馬次郎、養子の弥次郎も、肥後の國から加勢に求つた田井藤三郎も、殆んど同時に討死したと伝えられてゐる。

あづかに命を保つた助國の郎党小水郎と兵衛次郎は、舟を拾つて博多の大宰府守護所に注進に向かした。この注進は、早馬で京都へ伝えられた。到着は十月十七日、十二日後のことであつた。

島民は捕えられた者も多かつたが、天險の城、城山城に收容され、蒙古軍の暴虐から逃れたといわれる。この

城は大野城より古く、日本最古の城といわれる。突元たる天嶺、その異様に驚いた。人を寄せつけない岩場も多く、山上の台地はぎらめて広大なようである。これなら鳥氏全部も収容出来たであろう。私たちが日程の關係から登ることが出来ず、残念であった。

今小茂田の浜に立つと、美しい紺碧の海が、遠く限りない水平線を見せている。浜の石は珍らしく丸く、古い浜であることを物語る。七百年の歲月は、人々の恩怨を消し去って、悲慘であった元寇合戦の名残りは、何一つ見当らない。

弘安四年五月二十一日、対馬は再び蒙古軍四万の、宋路軍の襲撃を受けた。高麗の記録では、対馬の上陸地点は世界浦大明浦とあり、それが対馬のどこであるか不明であるが、上陸したのは高麗軍で、宋軍の奮戦で、名ある特兵の戦死するものが多かったといふことである。

私たちは、宗氏の菩提寺万松院(目の重要文化財)をたずねた。風雨に年々刻んだ山門が目につく。奥土桃山期のもので、屋根勾配やタタキなどの特徴を放せていた。諫鼓というものがあつた。この珍らしい石造のものは、殿に諫言をする際打ち鳴らしたものと云ふ。

往藏に案内されて本堂の傍ると、徳川氏歴代將軍の金箔大位牌が、ズラリと並んでいるのがラス戸越しに拝された。

年表によると、宗氏第二十九代義功の時、朝鮮の使者が江戸に参礼するのを改めて、対馬において宗氏が將軍の代行をした、とあるから、この金ピカの大位牌は、その頃からのものである。宗氏と朝鮮の信使の往及は極めて頻繁であつた。二十一代義真の頃から十一年の歲月を賞として、横原館というお城のような館が築造された。

て以来、そこで宗氏の接待が行なわれたものである。

現在ここには自衛隊が駐屯しているが、古びた高麗門が残っているばかりである。しかし、広大な跡跡と、美麗な対馬石の石垣は、往時の盛況と儼びすに充分である。

館を万松院に度そう。私たちは万松院の墓地をたずねることにした。日本三大墓地の一つと聞いている。石を敷いた石段がだらだら坂をつくっている。両側に五十個あまりの石燈籠が並んでいる。見事な大杉が点々と天を摩して繁っているあたり、広大な墓地がおちこちとみられて、四メシ程の大墓石が、人を圧して建っている。墓石は朝鮮あたりから運ばれたものだろうか、花崗岩に似ている。宗氏初代重尚以来三十六代、七百十一年土輪いて、島津氏、相良氏とともに、戦国期を無事乗りきつた古いお家柄である。

この墓地には、宗氏の当主は十五名程しか葬られていないが、中に目立って小さい墓が一つあつた。見れば十九代義智の墓である。この人こそ万松院と称した人で、文禄・慶長役には、小西行長と共に外交交渉に活躍し、出兵に際しては極力延期策を講じたが、秀吉の威力の前に押しきられて、自ら買って先鋒として朝鮮の山野に勇戦した人である。

文禄の役退避の時、秀吉は毛利高政に命じて、清水山城を築かせてツナギの城とした。現在一の丸から三の丸跡が、明確に残っている。(小野英治君は独りこの清水山に登り、城址を確かめて帰った。)

秀吉の没後徳川家康は、天下の实権が自らの手に帰すると、宗氏に諭して一日も早く朝鮮との国交回復を望み事を謀らした。宗氏の大いなる努力によって、其の後交渉日はかどり、慶長十二年(一六〇七)兩國の關係は旧に復

した。

慶長十四年になると、朝鮮は対馬と歳遣船・歳賜米等の約束をし、釜山浦に倭館を置いて、旧来の通り使者を待たせ、互市を行なわせた。いわゆる嘉吉条約の復活と謂ってよい。このように宗義智の功労はまことに大きい。

樹蔭に眠る英傑宗義智の墓を後にして、私たちが宿に引き揚げた。近くのお宮の前庭祭とかで、街は賑やかである。幼い頃を思い起こさせるかのように、小店がズラリと並んで、音楽が流れて祭気分を盛り上げていく。こんな祭りの人出は珍らしい、対馬だけだろうと話あった程である。

対馬に来て驚くことは、武家屋敷の多いことである。大小の身分を物語る屋敷が、そのまま残っているようである。これも対馬の特色であろうか。

対馬は、十萬石の格式どころでない。対馬は我が國を代表することしばしばであった。外交上、貿易上、重要な使命を果してきた國境の島、対馬は多くの武士をかかえ、苦難と共に歩いて来た歴史をもっている。

農業の進歩した今日でも、対馬では僅かに二か月を耕うだけしか米は獲れない。義真の頃及びめて甘藷が対馬に植えられた。画期的な出来事であったに違いない。陶山御庵の建議で、米や甘藷を食い荒らす、猪を殺す(殺猪令)が登せられ、其の功により二百石が給せられたのも、対馬ならでいの話かも知れない。朝鮮からの歳賜米の到来も、対馬人の大きな喜びであったと思われる。

この対馬と佐伯藩との関係はまだある。佐伯藩中興の英主、六代高慶の夫人は、この宗義真の娘である。

(備考注) その夫人が高慶公のすめによつて、龍護寺観音の前立位と逆つて御められたのである。

対馬と佐伯の関係は、このように、まことに深いもの

がある。

翌日、私たちは金石城跡にある資料館に入り、相当な時間を割いて勉強することにした。しかし本格的な歴史資料館へ建物は完成している(の開設は、また先のこと)である。おびただしい宗氏の史料は、やがて日鮮関係をはじめとして、あらゆる分野にわたって、正しいことと教ゆることになるかも知れない。

私たちは、対馬最後の見学は、万間橋をたずねた。対馬島の二つの島のくびれた処に、万間橋が架けられていく。明治二十九年から、潜水艦・駆逐艦の通過が出来た。明に、深く掘削された人工運河、その上に架けられた橋で、対馬名物の一つである。この辺に朝鮮からの密航者の監視小屋があったというのも、対馬らしい。

かくくりと対馬の風物を勉強する暇のないまま、私たちは帰りの機上の人となった。

大いなる海がひろがる。この海こそ、大陸からの渡来を拒みつづけたい海である。この海の征服なしでは耶馬台國にも、日本にも辿りつけない荒海であった。

かつて文永、弘安の頃のこの海は、元寇の大船団が押し寄せ、文禄、慶長の役には日本からの大船団が、この海を長い時間をかけて押し渡って行った。この海を征服したものは、倭寇だけであった。

この歴史の海を、私たちは僅かに二十三分間、志賀島の上空を巡って、博多に帰ることが出来た。(終)